閉会の言葉

本日は、お忙しい中、第23期生の宣誓戴帽式にご出席いただきまして、誠に有難うございます。

今年の4月6日、「看護師になるんだ」という決意をもって、彼らはこの泉の森ホールで入学式を終えました。しかし、その決意を行動に移す事は本当に難しく、1日24時間の使い方が、高校生の時と変化していなければ、勉強にはついていけない、授業でいわれている言葉がわからない、わからないから寝てしまう、おしゃべりするというような時期もありました。

立場を変換して考えれば、中学3年から高校2年までコロナ禍で、様々な活動を停止され、主体的に動くということすら経験させてもらえなったのですから、仕方がないことなのかもしれません。

然しながら、本校でのカリキュラムは3年で看護師になれるようにできているので、失った過去のせいにしていても前に進むことができません。そこからクラスで話し合い、どのようにしたら改善できるのか、入学してきた目的が果たせるのか、それぞれが考え、改善し、本日無事に宣誓戴帽式を迎えることができました。偉大な看護の理論家であるヴァージニア・ヘンダーソンは、その著「看護の本質」の中で、

「看護婦の仕事には、自己を知り、さまざまな人間に対して深い理解と幅広い同情をもった人格が要求される。（中略）なぜなら看護ケアの効果を測る場合、無形ではあるが最も重要な要素となるものは看護婦の人格だからである」[1)]と述べています。

そこで、23期生には、自分の人格が変化するほどの苦労を引き受ける覚悟ができているのか？と問いました。人格が変化するということは、①これまで何か悪いことが起こると、人のせいにするような他責思考だった人が、自分はどうすればもっとよい結果が出せたのか？と自分に責任を引き寄せて考えられる人になること。②他者の言動に対して、怒りで反応していた人が、どうしてその他者はそういう言動をしたのだろうか、と関心と理解で反応できるようになること。③そして自分にとってはつらくてしんどいことでも、常に目的を見据えて、前進し続ける自己管理能力を持ち備えること。看護師として、常に目の前にいる他者の健康と幸福（ウェルビーング）のために、今、自分は何ができるだろうか？と考え続けられること　など、沢山の看護師らしい人格への変化が挙げられると思います。

その問い受けて、本気で自分達を見つめ直し、覚悟を決めて選んだ言葉が、本日、皆さまに聞いていただきました、彼らの誓いの言葉となります。

では、誓いの言葉は、誰に誓うのか？　それは自分が自分の未来に対して誓う言葉です。例えて言うなら、グーグルマップで目的地をそこに登録したということになります。あとは自分の力で前進していくのみです。そして周囲の私達は、ただひたすらに彼らに潜在している自己学習能力を信じて、応援し続けることを覚悟しています。この7カ月間で成長し続ける彼らの姿を観ていると、クラスの歌、「遥か」の歌詞にあったように、彼らが地域から誇りに思ってもらえる日がくると信じています。

保護者の皆さまにおかれましては、これまでお子さんを一生懸命育ててこられ、喜びもひとしおのことかと存じます。ここからは、子供のままでは通用しない大人の世界に入っていきますので、どうかご家庭でも一人の大人として、彼らの意思と主体性を尊重して見守って頂けますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、学校を支えて頂いております3市3町の地域の皆さま、学校の教育方針を信頼し学びの場を提供し続けてくださっている実習施設の皆さま、学校の健全な運営にご尽力いただいております医師会の先生方、講師の先生方、そして卒業してからも学校のことを大事に思ってくれているIS太陽同窓会の皆さんにも、心から感謝の気持ちをお伝えさせていただきまして、私の挨拶とさせていただきます。本日はご出席いただきまして誠に有難うございました。

引用文献

1）ヴァージニア・ヘンダーソン，稲田八重子他訳：看護の本質 The Nature of Nursing，看護学翻訳論文集・1 , p18-39，現代社, 1967.